広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第42集

五反田第1•2号古墳発掘調査報告書

1985

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第42集
五反田第1・2号古墳発掘調査報告書　正誤表

頁・行	誤	正
5頁2行	葬方	葬法
8頁第5図	土層説明	土層説明 1　赤褐色粘質土層（盛土） 2　暗黄褐色粘質土層（旧表土） 3　黄赤褐色粘質土層（地山） 4　暗褐色土層 5　黄褐色砂質粘土層 6　黄褐色粘質土層 7　赤褐色砂質粘土層 8　暗褐色粘質土層

五反田第1•2号古墳発掘調査報告書

1985

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1．本書は、昭和59年７月２日～８月23日にわたって実施した一般国道375号国補道路改良工事に係る五反田（ごたんだ）第１・２号古墳（広島県三次（みよし）市小田幸（こだこう）町字日南（ひな）26－３）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、広島県三次土木建築事務所から委託を受けて、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

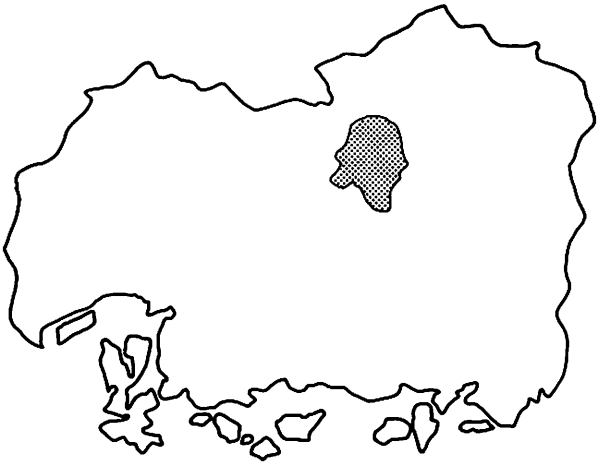
3．本書は、佐伯博司が執筆・編集した。

4．遺構の実測・写真撮影は松井和幸・佐伯が、遺物の実測・写真撮影及び実測図のトレースは佐伯が行った。

5．本書掲載の五反田古墳群一覧表作成にあたっては、広島県立歴史民俗資料館に御協力をいただいた。

6．本書に掲載した第１図は、建設省国土地理院発行の50,000分の１地形図（三次）を使用した。

7．本書に使用した方位はすべて磁北である。



三次市位置図

目　　次

Ⅰ　はじめに …… (1)

Ⅱ　位置と環境 …… (2)

Ⅲ　調査の概要 …… (6)

Ⅳ　まとめ …… (12)

図版目次

図版1　a　五反田第1・2号古墳遠景（北より）

b　同　上　（北東より）

図版2　a　第1・2号古墳調査前近景（北より）

b　同　上　（南より）

図版3　a　第1号古墳全景（南より）

b　同　上　（南西より）

図版4　a　第1・2号古墳全景（手前が第2号古墳、東より）

b　第2号古墳全景（南西より）

図版5　a　第2号古墳主体部（上…第1主体部、下…第2主体部、北東より）

b　同　上　（右…第1主体部、左…第2主体部、北西より）

図版6　a　調査風景

b　第1号古墳周溝内出土遺物

挿　図　目　次

第１図　五反田古墳群周辺主要遺跡分布図（１：50,000）……（３）
第２図　五反田古墳群分布図（１：5,000）……（４）
第３図　第１・２号古墳周辺地形図（１：1,000）……（６）
第４図　第１・２号古墳墳丘測量図（１：300）……（７）
第５図　第１・２号古墳墳丘断面図（１：80）……（８）
第６図　第１号古墳周溝内出土土器実測図（１：３）……（９）
第７図　第１号古墳周溝内出土鉄器実測図（１：２）……（10）
第８図　第２号古墳主体部実測図（１：30）……（11）
（上…第１主体部、下…第２主体部）

表　目　次

第１表　五反田古墳群一覧表……（５）

Ⅰ はじめに

今回実施した五反田第１・２号古墳の発掘調査は、一般国道375号国補道路改良工事に係るものである。

県北部に位置する三次市では、三次工業団地の完成や中国自動車道三次インターチェンジの開設によって交通量が増加している。また、県のほぼ中央部に位置する東広島市を中心とした広島中央テクノポリスの指定により、島根県大田市と呉市を結ぶ一般国道375号の交通量はさらに増加することが予想されている。ところが一般国道375号が通過する三次市小田幸町一帯は、道路幅が狭く、曲折の多いこともあって交通上の支障となっていたことから、交通体系の整備および三次地域の活性化を目的として改良工事が計画された。そして、昭和58(1983)年５月、広島県三次土木建築事務所(以下「三次土木」)という。）から広島県教育委員会（以下「県教委」という）に、一般国道375号国補道路改良工事予定地内における埋蔵文化財の有無ならびに取扱いについて照会があった。これを受けて、県教委は同年６月に分布調査を行い、同年10月試掘調査を実施した。当該地内に古墳１基（五反田古墳）の存在を確認したため、三次土木にこの旨回答するとともに、現状保存が困難な場合は発掘調査が必要であると通知した。同年11月、三次土木から五反田古墳の発掘調査の依頼が、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）にあったが、58年度中の調査は他の事業との関係で困難であったため、59年度に行うこととなった。そこでセンターは、昭和59(1984)年５月文化庁へ発掘届を提出し、６月に三次土木と発掘調査委託契約を結び、７月２日～８月23日にかけて約２か月、発掘調査を実施した。なお、調査にあたって、調査区域内に新たに古墳１基（五反田第２号古墳）を確認したため、先に確認されていた古墳を五反田第１号古墳と名称を変更し、あわせて調査を行った。調査面積は約800㎡である。なお、調査中同一丘陵上に17基の古墳を確認したため、五反田第１・２号古墳を含む19基を五反田古墳群とした。

本書はこの記録をまとめたものである。本書が、単に学術報告にとどまらず、当地域研究の新たな資料として活用されることを希望する。

調査にあたっては、三次市教育委員会、広島県三次土木建築事務所、広島県立歴史民俗資料館及び地元の方々から多大な御協力を得た。記して謝意を表したい。

II 位 置 と 環 境

五反田第１・２号古墳は、三次市小田幸町字日南26－３に所在する。市街地の東南約７kmで馬洗川に合流する美波羅川は、下流域で蛇行しながら北流している。この美波羅川の下流域一帯は、標高約240～300m、比高約20～80mの低丘陵が支谷に侵蝕を受けて複雑な地形を呈しながら広がっている。支谷の谷頭には溜池が発達し、谷水田が営まれている。本古墳群のある丘陵は、このような低丘陵地帯の一角にあり、周辺の丘陵よりやや低く、第１・２号古墳は標高約210ｍ、比高約20ｍの西から東に延びた丘陵の先端部に位置している。丘陵眼下の南及び北には、丘陵に沿って細長く延びた谷水田が発達している。なお、本古墳群の北方約500mには史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群があり、南方約500mには一本木古墳群、東方約１kmには上定古墳群がある。これら古墳群の多くは本古墳群と同じように低丘陵地帯に位置し、眼下に谷水田をのぞんでいる。

三次盆地は約3,000基の古墳が存在する県内有数の古墳密集地で、古墳や遺跡が多数存在している。以下、当地域の主な遺跡を中心に歴史的環境を概観してみたい。旧石器時代では、下本谷遺跡[1]、松ヶ迫遺跡群[2]、下山遺跡群[3]などで調査が行われている。縄文時代では、早期と後期の遺跡がわずかに知られているにすぎない。早期の遺跡では、下本谷遺跡、松ヶ迫遺跡群などがあり、後期の遺跡では、元国遺跡、岡竹遺跡などがある。弥生時代の前期の遺跡では、高平遺跡[4]の土壙墓や高蜂遺跡[5]の住居跡が知られている。この地域で遺跡数が増加するのは中期以降で、低丘陵地帯に分布している。その代表的な遺跡が塩町遺跡である。この遺跡では、中期後半中心の円形竪穴住居跡10数軒が検出され、出土土器は凹線文が盛行する中期後半の指標となっており、塩町式の名称で呼ばれている。ところで墳墓についてみると、史跡花園遺跡[6]、宗祐池西遺跡、矢谷四隅突出型前方後方形墓[2]（史跡矢谷古墳）などが調査されている。これらは当地域だけでなく、島根県・鳥取県・岡山県などを含む弥生時代の墳墓から古墳への墓制の変遷過程と地域的特質を示している。

三次盆地内の古墳の分布は、盆地の南側に広がる標高200～350mのなだらかな低丘陵地帯に集中している。前期古墳をあげると、県史跡岩脇古墳、糸井塚ノ本第１号古墳（糸井大塚）、県史跡酒屋高塚古墳[7]、浄楽寺・七ツ塚古墳群などがある。岩脇古墳は、江の川と馬洗川が合流する地点の西側比高約50mの丘陵上に位置する径30m、高さ約4.5mの円墳である。糸井塚ノ本第１号古墳は全長65m、高さ約10m、酒屋高塚古墳は全長46m、高さ7.0mのいずれも帆立貝式古墳である。前者は当地域では最大規模を誇っており、後者は主体部の竪穴式石室から、岡山県茶臼山古墳・熊本県江田船山古墳出土鏡などと同笵の画文帯神獣鏡を出土している。また、浄楽寺・七ツ塚古墳群は、総数172基からなる県下でも最大級の古墳群で、径42ｍ、高さ約６ｍの円墳の他に、帆立貝式古墳や方墳、小規模な前方後円墳などが存在している。以上述

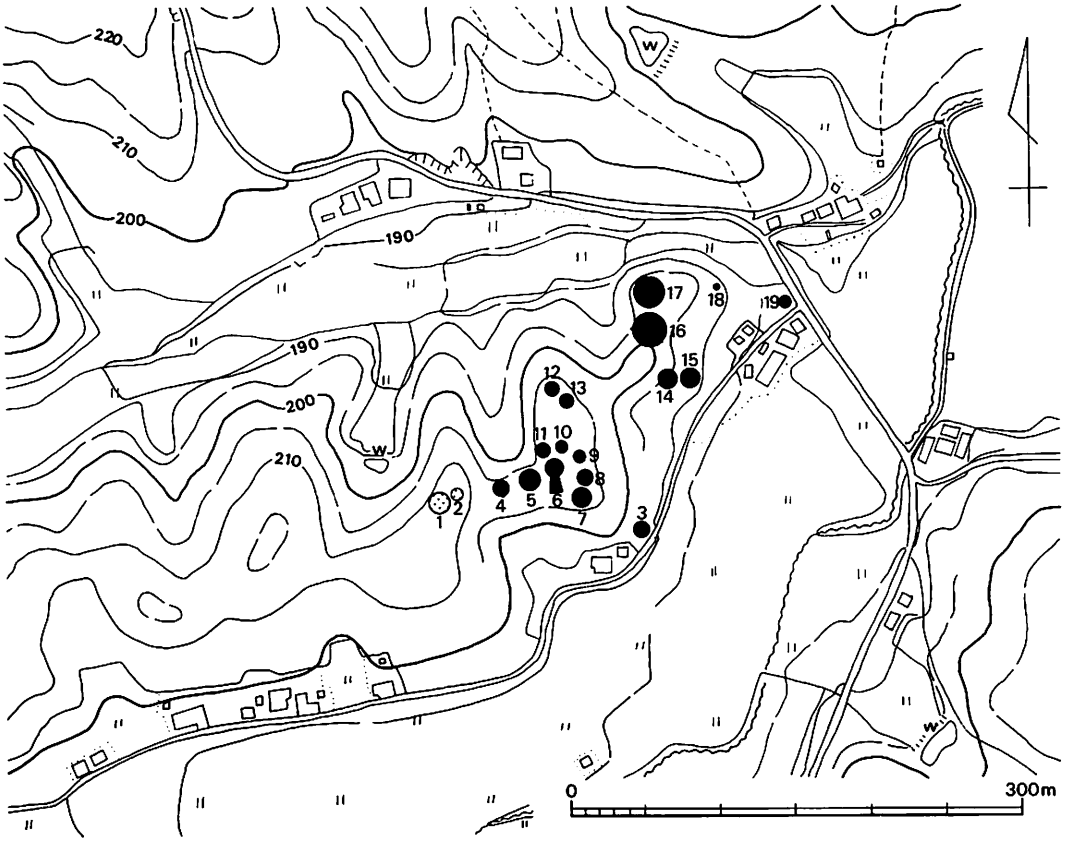
第1図　五反田古墳群周辺主要遺跡分布図(1：50,000)

1．五反田古墳群　2．酒屋高塚古墳　3．高平遺跡　4．岡竹遺跡　5．花園遺跡
6．日光寺遺跡　7．下本谷遺跡　8．宗祐池西遺跡　9．松ケ迫遺跡群・矢谷古墳
10. 高峰遺跡　11. 下山遺跡　12. 浄楽寺・七ツ塚古墳群　13. 萱草古墳群
14. 重岡山遺跡　15. 塩町遺跡　16. 形古墳群　17. 糸井中ノ尻古墳群
18. 糸井大峠古墳群　19. 糸井廻泊古墳群　20. 糸井塚ノ本古墳群・糸井大塚
21. 一本木古墳群　22. 上定古墳群　23. 殿山古墳群

べた古墳は、いずれも5世紀以降のもので、今のところ4世紀代にさかのぼるものはない。

当地域の古墳のなかで、前述したような大型古墳の数はきわめて少く、古墳の大部分は、径5～15m、高さ1～2mの低墳丘の小円墳である。これらは、木棺や箱式石棺などを内部主体とし、出土遺物をほとんど伴わない。県北一帯には、このような古墳が数基～10数基で古墳群を形成していることが多い。本古墳群もその一例である。しかし、各古墳群のあり方をみると、浄楽寺・七ツ塚古墳群のように、主墳とみられる比較的大きな円墳、帆立貝式古墳を中核に約180基近くからなり、さらにその中がいくつかの支群にわかれるとみられるもの、あるいは、形古墳群[8]のように数基の小円墳のみでなるもの、本古墳群のように小型前方後円墳を中核に数基～10数基からなるものなどがあり、そのあり方は一様ではない。

当地域における後期古墳についてみると、横穴式石室が一般に普及するのは、6世紀後半になってからである。しかし、若屋第9号古墳[9]は6世紀中葉のものとされており、すでに6世紀後半以前に横穴式石室の採用があったことが知られる。横穴式石室を内部主体とする古墳は、現在のところ、当地域では山手古墳群、糸井中ノ尻古墳群、久々原古墳群[10]、野曽原北古墳群などのように、谷頭や丘陵斜面などに立地しているものが多い。だが、その数は当地域の古墳総



第2図　五反田古墳群分布図(1：5,000)

数と比較して少いといえる。なお、このことは、当地域では石材の入手が困難であるという事情の他、古墳時代前期からの葬方である木棺直葬などがひきつづいて行われていた可能性をうかがわせる。

最近の調査によると、松ヶ迫遺跡群、宗祐池西遺跡では、6世紀末～8世紀前半の小型横穴式石室とともに、同時期の竪穴式石室、箱式石棺、石蓋土壙、土器棺、土壙などが確認されている。これは後期の埋葬形態が、横穴式石室を内部主体とする古墳以外に、前代の埋葬形態を継承し、多様性を有していたことを示している。

古墳時代の住居跡としては、日光寺遺跡、重岡山遺跡[11]などで方形竪穴住居跡が検出されている。また、松ヶ迫遺跡群で、6世紀中葉～8世紀にかけて、丘陵斜面に階段状の平坦面を構築し、複雑に重なりあった総数200軒あまりの住居跡が検出され、集落跡の詳細が知られるようになってきた。

奈良～平安時代の遺跡としては、下本谷遺跡、史跡寺町廃寺跡[12]などがある。下本谷遺跡は三次郡衙跡と推定され、庁院部・倉庫など多くの掘立柱建物跡が検出されている。寺町廃寺跡は『日本霊異記』の三谷寺に比定され、法起寺式の伽藍配置も明らかにされている。

第1表　五反田古墳群一覧表

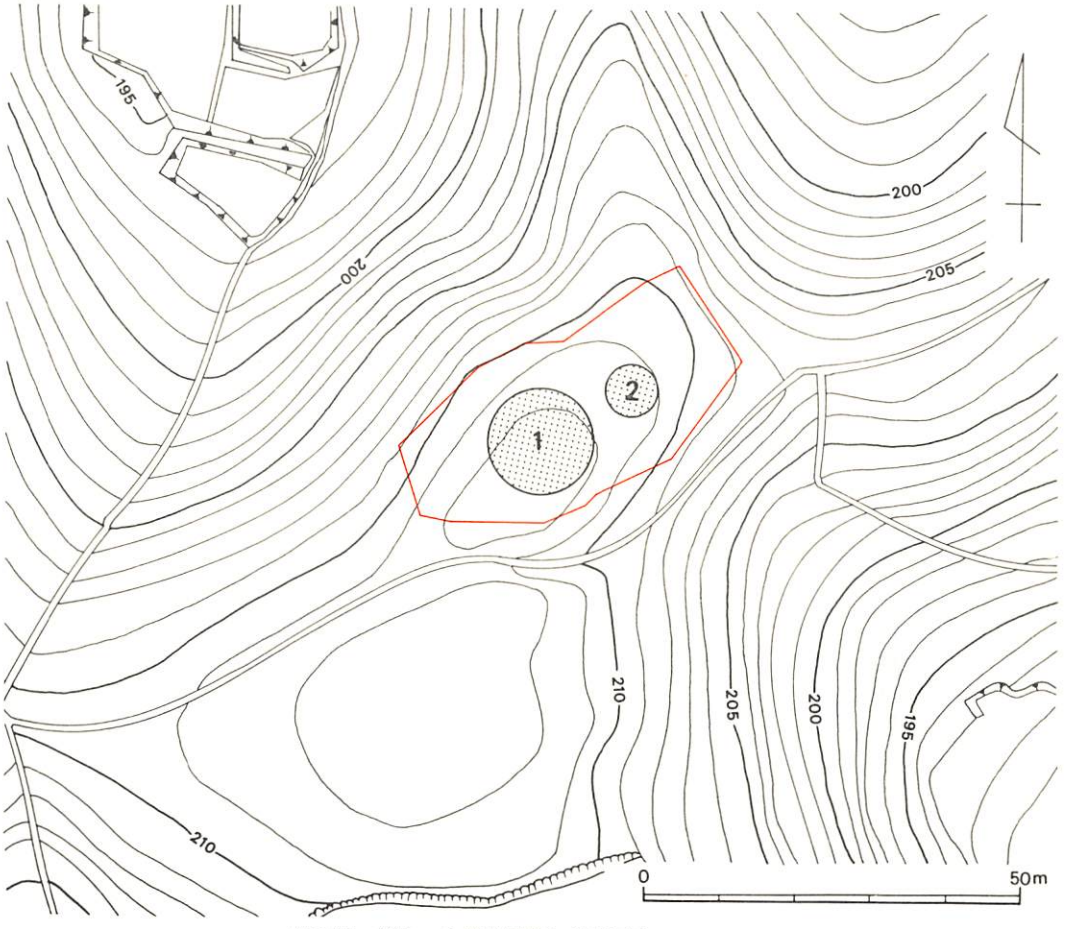
群	名称	墳形	現状規模m	現在高m	備考
A	第1号古墳	円墳	13.0×13.5	0.6～1.2	今回報告
	2	〃	6.5×7	0.3～0.5	今回報告
	3	〃	10	1.2	
	4	〃	10	1.0	
	5	〃	14	2.5	幅3mの周溝、石材あり
	6	前方後円墳	19	2.5	後円径11m、幅2mの周溝あり
	7	円墳	12	1.0	
	8	〃	10	1.5	石材あり
	9	〃	8	1.0	幅1mの周溝あり
	10	〃	7.5	0.8	
	11	〃	9	0.8	
	12	〃	9	1.0	幅1mの周溝あり
	13	〃	9	1.5	長さ約2mの箱式石棺あり
B	14	〃	12	1.0	自然地形の可能性あり
	15	〃	13	2.0	幅1mの周溝あり
	16	〃	23	4.0	掘方3.5m×1.5m 幅3mの周溝あり（一部共有）
	17	〃	20	4.0	石材あり 幅3mの周溝あり（一部共有）
	18	〃	4	0.5	自然地形の可能性あり
	19	〃	8	0.8	幅1mの背面カットあり

Ⅲ 調 査 の 概 要

1．調査の状況（第２～５図）

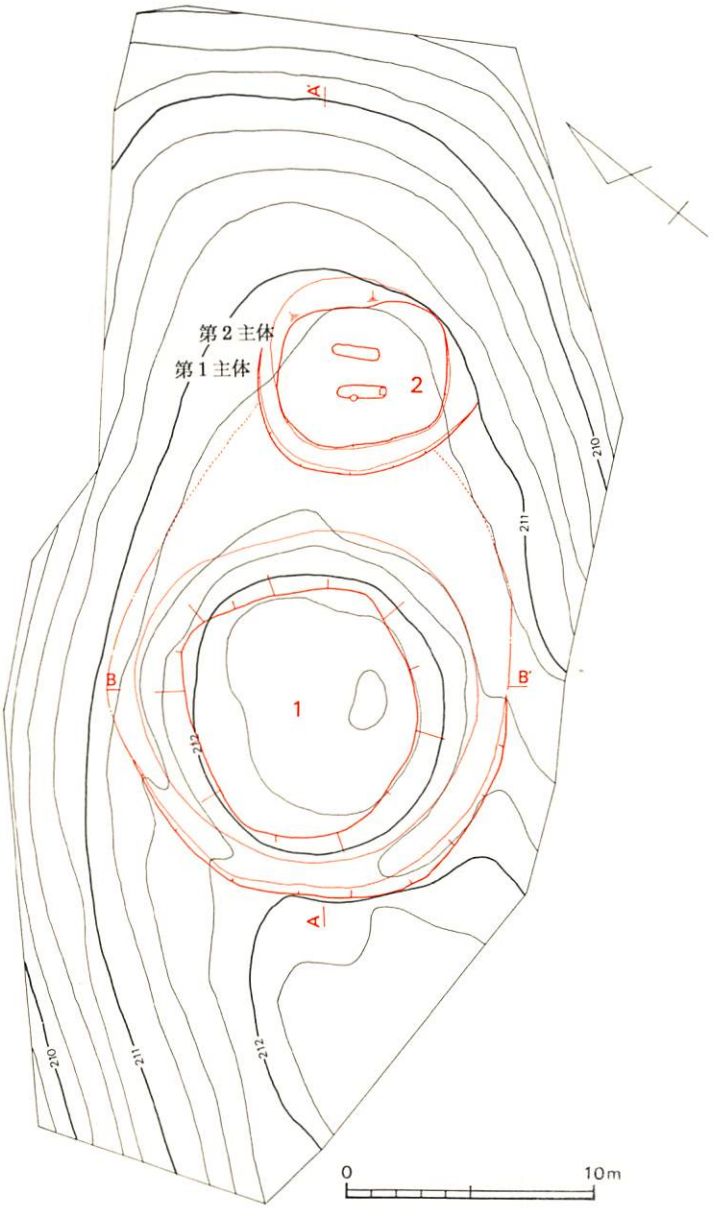
五反田古墳群は、全長約19mの前方後円墳１基と円墳18基からなる古墳群で、西から東へのびる標高約190～210mの丘陵尾根上に立地し、水田面からの比高約５～25mである。本古墳群の分布状況をみると、立地上次の２つのグループにわけることができる。即ち、丘陵尾根頂部に立地する全長約19mの前方後円墳である第６号古墳を主墳とするＡグループ（第１～13号古墳）と、丘陵がやや下った場所に立地する径約23m、および径約20mの円墳で周溝を一部共有する第16・17号古墳を主墳とするＢグループ（第14～19号古墳）である。なお、今回発掘調査を行った第１・２号古墳は前者のグループに属している。

本古墳群の西端にある第１・２号古墳は、南西から北東へのびる小さな尾根の標高約210～212m付近に位置する。第１号古墳は発掘前の地形測量において径約13mを推定した。調査は

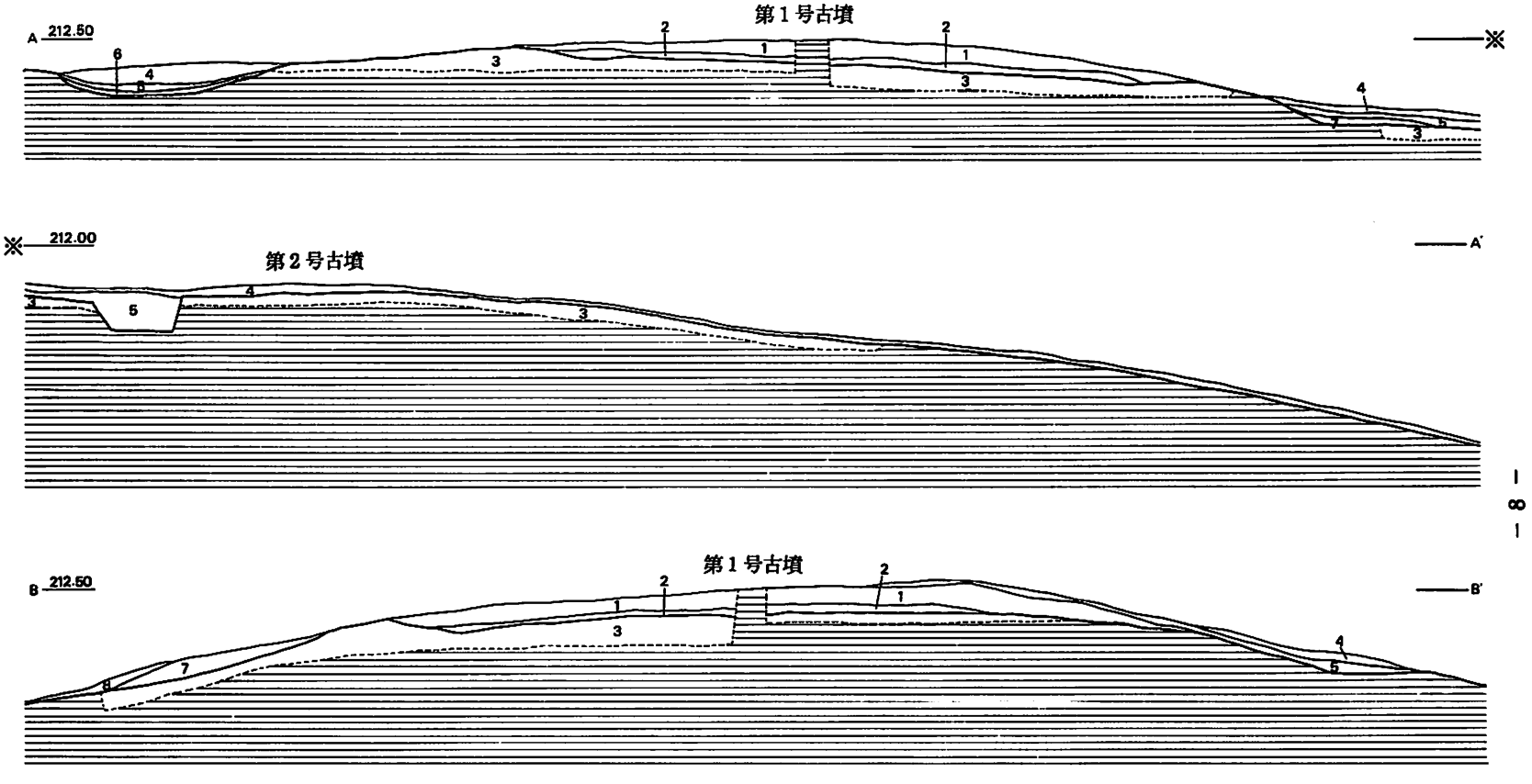


第３図　第１・２号古墳周辺地形図（１：1,000）

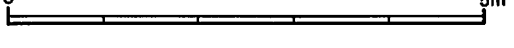
第１号古墳墳頂部中央に基準杭を設定し、尾根に沿って基線Ａ－Ａ′を、基準杭においてＡ－Ａ′と直交する基線Ｂ－Ｂ′を設定した後、十字に土層観察用の畦（幅50cm）を残し、表土の全面除去、掘り下げを行った。その結果、第１号古墳は北西～南東裾に幅 2.6m、深さ 0.4m の周溝がめぐり、丘陵尾根が下っていく北東裾にむかってしだいに周溝外側の立ち上がりがな



第４図　第１・２号古墳墳丘測量図（１：300）



土層説明



第5図　第1・2号古墳墳丘断面図(1：80)

い平坦面へと変化し、墳丘裾をめぐっている。なお、新たに検出した第２号古墳は径約７ｍの円墳で、内部主体は２基の土壙であることを確認した。

２．第１号古墳

墳　丘

本古墳の墳丘規模は、南北13.0m、東西13.5mである。なお、周溝及び平坦面を含む古墳の規模は、尾根の主軸に沿うＡ－Ａ′では、平坦面が第２号古墳により壊されているため明確にはできないが約19mと推定され、尾根の主軸と直交するＢ－Ｂ′では約16mである。墳丘の高さは周溝溝底及び平坦面から0.6～1.2mである。本古墳の基本的層序は、各基線に沿った土層断面によると、上層から順に、表土層、赤褐色粘質土層、暗黄褐色粘質土層、黄赤褐色粘質土層となっている。このうち、最下層の黄赤褐色粘質土層は地山であり、その上層にある暗黄褐色粘質土層は旧表土と推定される。したがって、表土層の下にある赤褐色粘質土層は盛土と考えられるが、現状では最も厚いところで0.3mしかなく、大部分は流出したと思われる。なお、主体部は検出できなかった。

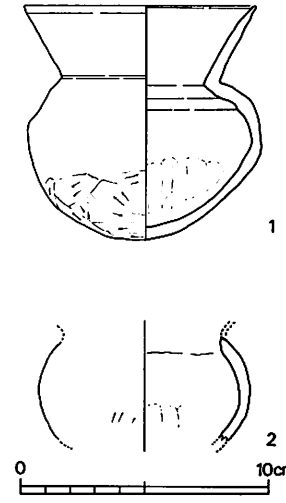
周溝・平坦面

周溝及び平坦面は、旧表土と地山を削って造っている。周溝が確認できたのは、北西～南東裾にかけてで、最も遺存のよい南西側では、上端の幅2.6m、下端の幅1.0m、深さ0.4mである。また、北西裾及び南東裾は、周溝外側の立ち上がりが丘陵斜面にかかるため流出したためか、または溝底を北東裾の平坦面につづけるためか、周溝外側の立ち上がりを確認できなかった。北東裾では周溝外側の立ち上がりがなく、溝底部分に代って平坦面を造り出している。

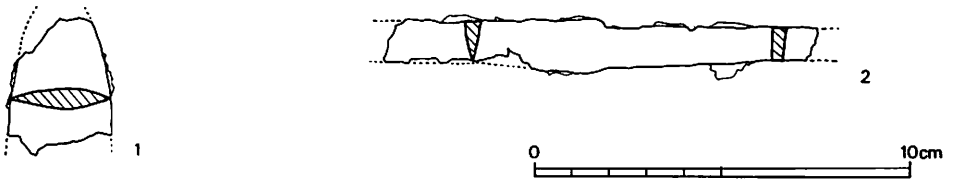
出土遺物

本古墳に伴う出土遺物は、最も遺存のよい西～南裾の周溝内に集中しており、土師器片、鉄製刀子が、また東裾から鉄製品が出土した。なお、北東裾の暗褐色土層から須恵器（甕）の破片がまとまって出土した。

土師器（第６図、図版６ｂ）　復元可能なものは、坩２個のみである。ともに南裾周溝内の溝底近くから出土した。１は口径9.5cm、頸部径5.7cm、胴部最大径9.5cm、器高9.3cmのほぼ完形品である。頸部はゆるやかに「く」の字形に屈折し、口縁部は斜上方にのび、端部を丸くおさめている。内外面とも上半はナデ、外面下半はヘラ削り、内面下半は底部から強くナデ上げを行っている。淡黄褐色を呈し、胎土には１mm大の砂粒を若干含み、焼成は良好である。２は復元胴部最大径8.6cmの淡茶褐色を呈する坩である。頸部はゆるやかに「く」の字形に屈折し、ほぼ１と同様の立ち上がりを示すと思われる。成形・



第６図　第１号古墳周溝内出土土器実測図（１：３）



第7図　第1号古墳周溝内出土鉄器実測図(1：2)

調整・胎土・焼成とも1と同様である。なお、胴部中央に粘土紐の接合痕跡を残している。

鉄器（第7図、図版6 b）　平根式鉄鏃の刃部または鉄剣の切先部とみられる鉄製品と刀子が出土している。1の鉄製品は、現存長3.6cm、幅2.5cm、厚さ0.5cmである。2の刀子は、切先部と茎部端部を欠き、現存長11.7cmである。刃部は背厚0.4cm、幅1.5cmで、茎部は0.4×0.9cmの矩形をしている。関についてみると、棟側はほぼ直角に立ち上がり、刃側ではかるく弧をえがく両関式である。刃部中央部は使用によるためか、摩滅してやや内湾する。

3．第2号古墳

墳丘・周溝

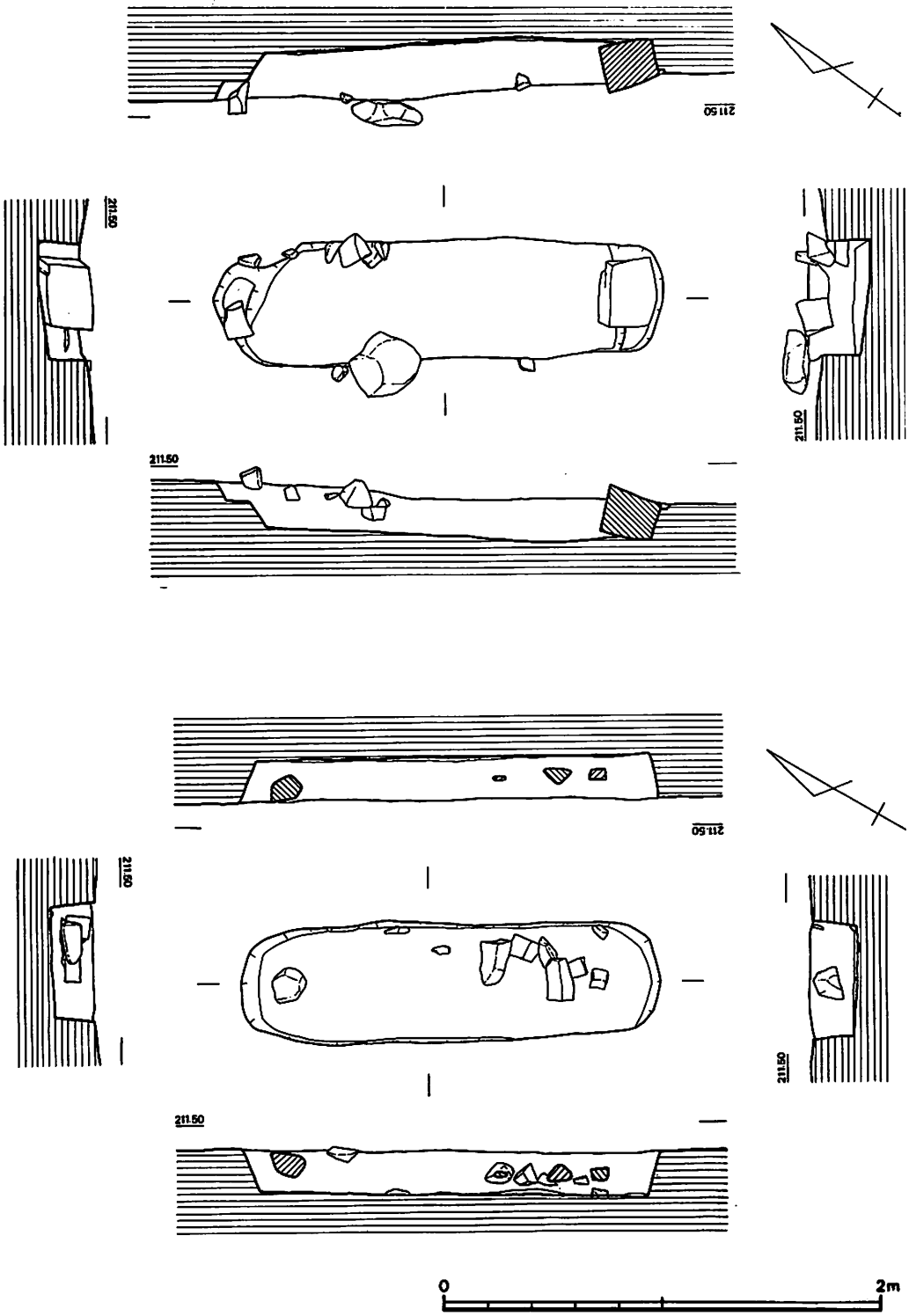
本古墳は、第1号古墳の北東に位置し、その平坦面を壊して築造している。本古墳の墳丘規模は、東半分の立ち上がりが丘陵斜面のため不明確であるが、南北約6.5m、東西約7mと推定される。墳丘の高さは、周溝溝底及び墳端より0.3～0.5mである。周溝は西半分に認められ、上端の幅1.0m、下端の幅0.7m、深さ0.4mであるが、東半分については地形が下がっているため、現状では第1号古墳のような平坦地はみられない。墳丘の築成についてみると、赤褐色粘質土層の盛土は流出したためか、地山の黄赤褐色粘質土層の上には、第1号古墳の北東裾からつづく暗褐色土層があるにすぎない。

内部主体（第8図、図版5）

墳丘のほぼ中央部に、尾根の主軸にほぼ直交して、地山を掘り込んでつくった2基の土壙を確認し、西から第1・第2主体部とした。しかし、両主体部ともに遺物は全く出土しなかった。

第1主体部　墳頂中央よりやや西側に寄って検出した長方形の土壙で、長さ2.05m、幅0.55m、深さ0.25mである。壙底はほぼ平坦で、側壁は壙底からほぼ垂直に立ち上がる。北小口の立ち上がりは二段となり、南小口の立ち上がりはゆるやかである。南小口には、一辺30cm前後の角礫を壙底から若干埋めこんでおり、西側壁肩にはやや扁平な石があり、土壙内には北小口と東側壁に沿って数個の角礫が壙底から浮いた状態でみられた。

第2主体部　第1主体部の東側約1m離れて検出した長方形の土壙で、長さ1.95m、幅0.55m、深さ0.20mである。壙底はほぼ平坦で、小口・側壁とも壙底からほぼ垂直に近い状態で立ち上がる。土壙内には、大小の角礫が南側に8個、北小口側に1個、東側壁に沿って2個が壙底からやや浮いた状態でみられた。



第8図　第2号古墳主体部実測図(1：30)
(上…第1主体部，下…第2主体部)

Ⅳ　ま　と　め

以上、美波羅川西岸に広がる低丘陵上に位置する五反田古墳群のうち、今回発掘調査の対象となった2基の古墳について、その概要を記した。

第1号古墳は、墳丘規模南北13.0m、東西13.5m、高さ0.6～1.2mの円墳で、北西～南東裾にかけて周溝がめぐり、北東裾は幅約4m近い平坦面で区画されている。主体部は、地山面に土壙を掘り込んだ痕跡が全くみられず、また土師器・鉄製刀子などが周溝内より出土していることからすると、盛土中に掘り込まれていた可能性がある。そして、盛土の流出に伴い、棺内遺物や供献土器などが周溝内へ転落したと思われる。この地域の古墳には、形第2号古墳、四拾貫日南第35・36・37・38号古墳、四拾貫小原第2・3・4号古墳などのように、低墳丘で内部主体が確認されていない小規模古墳が知られており、本古墳もこのような古墳の一つであると考えられる。

次に、周溝内から出土した土師器（第6図1）は、庄原市上原町熊野遺跡[13]出土でⅢb類に分類されている5世紀後半の土師器とほぼ同時期のものと思われる。Ⅲb類の土師器は、胴部径と口径がそれぞれ同じ、頸部は「く」の字形に屈折、口縁部は斜上方にのび端部は丸くおさめ、器面は口頸部内外ともヨコナデ調整、胴部中位以下は斜方向に削るなどの特徴をもっており、本古墳出土の土師器もその特徴を有している。また、北東裾、第2号古墳周溝上の暗褐色土層から出土した須恵器（甕）の破片は、出土地点からみると本古墳に伴うものと思われる。小片のため明確な時期決定はできないが、調整手法からみると6世紀以降のものと推定される。ただ、本古墳周溝内出土の土師器の時期とは異なっており、第2号古墳に伴う可能性や本古墳築造後の祭祀に伴う可能性もあろう。

第2号古墳は、第1号古墳北東裾の平坦面を壊して築造した南北約6.5m、東西約7m、高さ0.3～0.5mの円墳で、西半分に周溝がある。墳丘中央部から尾根の主軸にほぼ直交する2基の土壙を検出した。2基の土壙は、規模、壙底及び土壙内の角礫の出土状況からみて、箱形木棺を納めていたものと考えられる。土壙内の角礫は、木棺を支えるための詰石、あるいは棺蓋の上に置かれていたものと推定され、とくに、第1主体部南小口に若干埋めこんだ角礫は小口板をおさえる役割を果たしていたと思われる。また、土壙の掘り込みは、前述したように地山面（黄赤褐色粘質土層）で確認したが、土壙内に陥入した土層の状況（第1主体部・第2主体部ともに、赤褐色粘質土層の上に暗黄褐色粘質土層が堆積している。）をみると、本来の掘り込みは地山面ではなく、旧表土面（暗黄褐色粘質土層）かまたは盛土面（赤褐色粘質土層）の可能性がある。

次に、第1号古墳及び第2号古墳の築造年代について考えてみたい。第1号古墳は、主体部が検出されず、出土遺物もごくわずかで、築造年代を明確にするのは困難である。しかし、周

溝内から出土した土師器、墳丘の築成方法、県北における横穴式石室採用前の小規模古墳による古墳群のあり方などからみて、5世紀後半～6世紀前半に築造されたと考えられる。また、第2号古墳は、同一墳丘内に複数の主体部をもつ複数埋葬の古墳であるが、この形態は、上四拾貫第4・10号古墳、四拾貫小原第1号古墳など、横穴式石室が構築される前の5世紀～6世紀前半にかけての時期にみられる。このことから、第2号古墳は第1号古墳築造後、それ程時期を経ないで築造されたものと思われる。

最後に本古墳群のあり方を周辺の古墳群のあり方との関係でみると、周辺の古墳群は、複数の首長級大型古墳を核に172基からなり、いくつかの支群にわけられる浄楽寺・七ツ塚古墳群、大型の帆立貝式古墳を中核に数基の小円墳からなる糸井塚ノ本古墳群、1～2基の小型前方後円墳を中核に数基～数10基からなる本古墳群や西谷古墳群、殿山古墳群、径20m前後の円墳を中核として数基～数10基からなる糸井鷹泊古墳群や萱草古墳群、数10基からなるが明確に核となる古墳のない上定古墳群、径10m前後の小円墳数基からなる一本木古墳群、10基前後からなり、横穴式石室を内部主体とする糸井大峠古墳群や糸井中ノ尻古墳群など、いくつかの違いがみられる。このように多様な古墳群のあり方は、本古墳群の周辺だけでなく、三次盆地一帯でみられるが、このような古墳群のあり方の違いは、それぞれの地域の生産力や集落の規模などの経済的社会的要因、各地の首長層の政治的権威や権力などの要因などによるものと思われる。しかし、古墳群として調査された例は少く、その成立過程、生産基盤、他の古墳群及び畿内を中心とした政治権力とのかかわりなど明らかでない部分が多い。本古墳群においても、総数19基のうち、わずか2基の調査であり、しかも出土遺物も少く、第1号古墳では主体部も検出できないなど、現時点では本古墳群の成立過程や、周辺の古墳群との関係、また古墳群内におけるAグループとBグループとの関係など不明なことが多い。なお、本古墳群において小規模ながらAグループに前方後円墳が1基存在することや、Bグループに前方後円墳よりやや大きい円墳が2基存在することは、本古墳群のあり方を考える上で重要な意味をもつものと思われる。今後、本古墳群と類似の構成をもつ古墳群や、周辺の古墳群の調査がすすんでいくなかで、本古墳群のあり方も明らかになっていくであろう。

なお、第2号古墳は今回の調査において表土を全面除去しても確認できず、掘り下げを行ってはじめて、主体部・周溝などを検出して古墳であることが確認できた。このような本古墳のあり方からすると、本古墳群は現在のところ19基で構成しているが、今後の調査により数が増加する可能性がある。このような小規模・低墳丘の古墳は、例えば本古墳群の北方に位置する浄楽寺・七ツ塚古墳群などの中にも存在しており、今後そのあり方について検討をはかっていく必要があろう。

註

（1） 下本谷遺跡発掘調査団『下本谷遺跡－推定備後国三次郡衙跡の発掘調査報告－』昭和50(1975)年
広島県教育委員会『下本谷遺跡発掘調査概報』 昭和55(1980)年、他
なお、奈良時代の庁院部の一部が県史跡に指定されている。

（2） 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告－三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』 昭和56(1981)年

（3） 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『下山遺跡群発掘調査報告』
昭和55(1980)年

（4） 潮見浩・川越哲志・河瀬正利「広島県三次市高平遺跡発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第9集 昭和46(1971)年

（5） 広島県教育委員会「高蜂遺跡」『緑岩古墳－三次地区工業団地第2期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』 昭和58(1983)年

（6） 三次市教育委員会『史跡花園遺跡－調査と整備－』 昭和54(1979)年、他

（7） 広島県教育委員会『酒屋高塚古墳』 昭和58(1983)年

（8） 広島県教育委員会『形第2号古墳発掘調査概報』 昭和50(1975)年

（9） 広島県双三郡三次市史料総覧編修委員会編『広島県双三郡三次市史料総覧』第5篇 昭和49(1974)年の名称による。なお、文化庁『全国遺跡地図 広島県』昭和57(1982)年の若屋南古墳にあたる。

(10) 古瀬清秀「久々原第2号古墳」『日本考古学年報28(1975年版)』日本考古学協会
昭和52 (1977) 年
広島県教育委員会「久々原第10号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)』
昭和54(1979)年

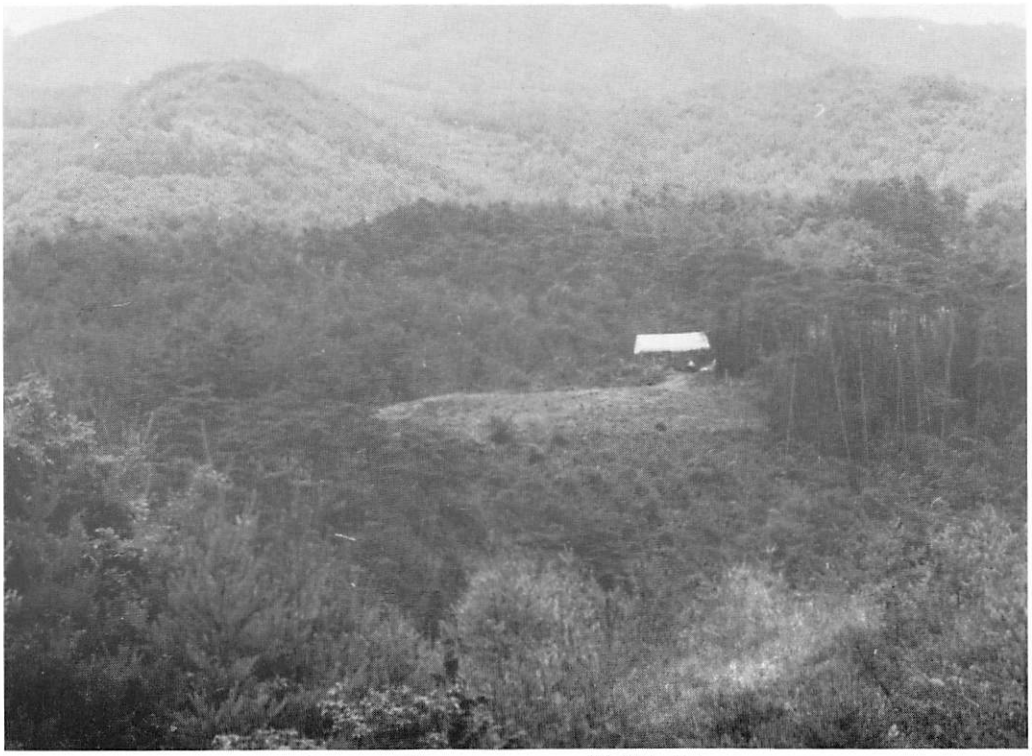
(11) 重岡山遺跡発掘調査団『重岡山遺跡発掘調査報告』 昭和55 1980)年

(12) 三次市教育委員会『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第1次発掘調査概報－』 昭和56(1981)年、他

(13) 向田裕始「庄原市上原町熊野遺跡出土の土師器」『芸備』第2集芸備友の会 昭和49(1974)年

なお、本報告書を執筆するにあたって、広島県双三郡三次市史料総覧編修委員会編『広島県双三郡三次市史料総覧』第5篇を参考にした。

a　五反田第１・２号古墳遠景(北より)

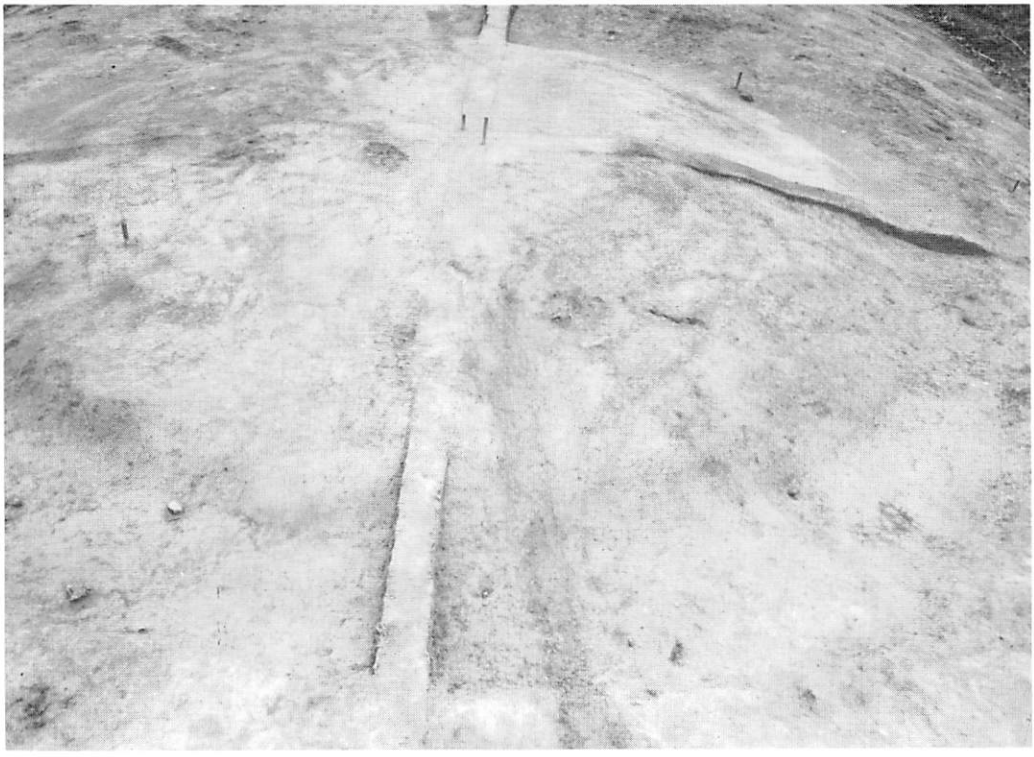


b　同　上　(北東より)

a　第１・２号古墳調査前近景(北より)

b　同　上　(南より)

a　第１号古墳全景(南より)

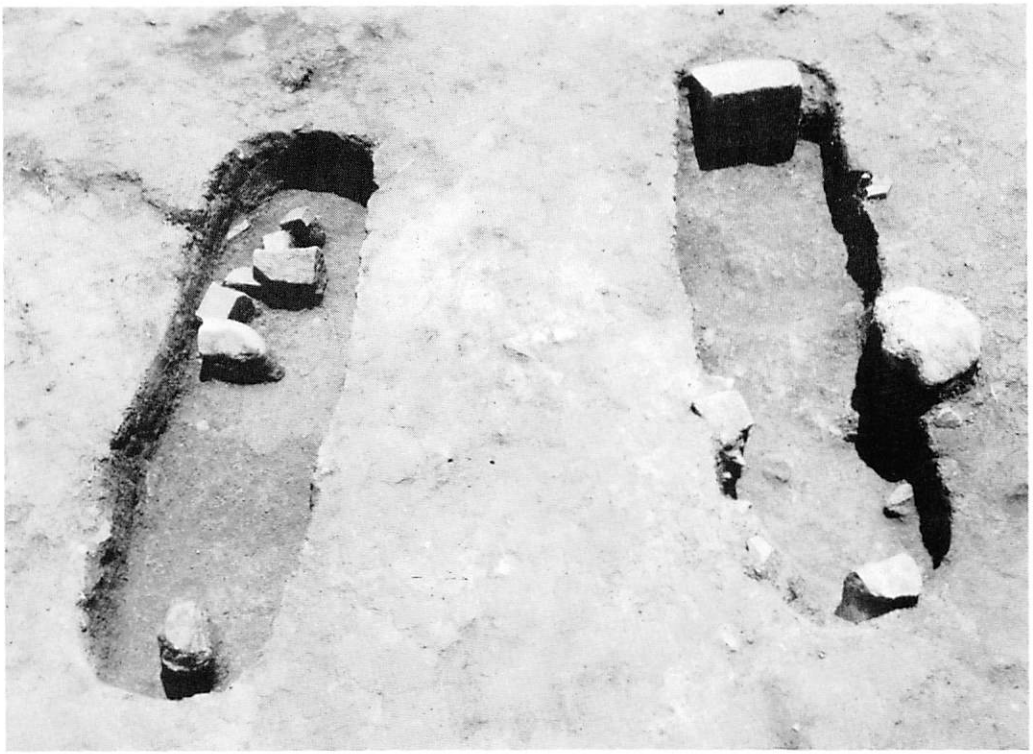


b　同　上　(南西より)

a　第1・2号古墳全景(手前が第2号古墳，東より)

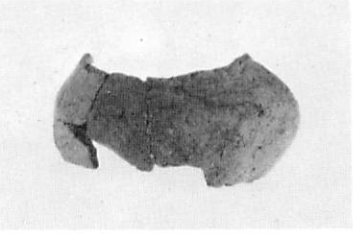
b　第2号古墳全景(南西より)

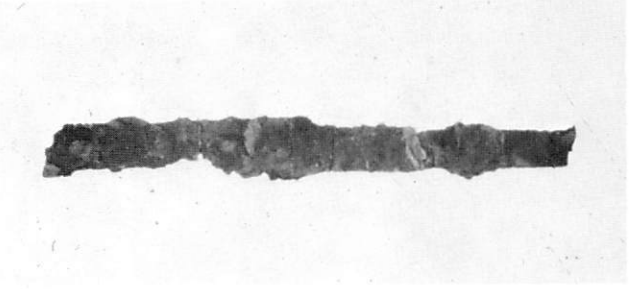
a　第２号古墳主体部(上…第１主体部，下…第２主体部，北東より)



b　同　上　(右…第１主体部，左…第２主体部，北西より)

a 調 査 風 景





b 第1号古墳周溝内出土遺物

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第42集

五反田第1・2号古墳発掘調査報告書

昭和60(1985)年3月

編集・発行　財団法人
広島県埋蔵文化財調査センター

印　　刷　有限会社　高　橋　勝　写　堂